



Risk Flash No.51 (Vol.2 No37)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター
発行責任者：リスク研究センター長 久保英也
〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1
TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189
e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp
Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>

- 海外企業研究プロジェクト報告1：シンガポールスタディツアー・・・Page 1
- 今週の著書紹介：『労働再審③ 女性と労働』・・・Page 2
- 教員紹介：竹中厚雄・リスク研究センター通信・・・Page 3

海外企業研究プロジェクト報告 1

企業を舞台にしたグローバル人材育成プログラムを実施！
平成 23 年度 経済学部・海外企業研究プロジェクト&シンガポールスタディツアー

しばたまさみ
経済学部特任准教授 柴田雅美

本学経済学部では、平成 22 年度から取り組んでいる文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」の一環として、海外展開する日本のトップ企業の現場体験から企業のグローバル戦略やリスクマネジメントを学ぶことで、国際的な視野を持ったグローバル人材の育成を図ることを目指した海外企業研究プロジェクトを企画しました。

宮西賢次・本学准教授を中心に、平成 23 年 3 月から現地調査とプログラム開発に着手し、キックオフ講演会、人的資源管理・海外 R&D 戦略・リーダーシップなどをテーマにした夏季集中講義とシンガポールスタディツアーからなるグローバル人材育成プログラムを実施しました。プログラムの概要は次の通りです。

■キックオフ講演会

平成 23 年 5 月 31 日（火）、本学講義室にて 「グローバルに活躍する人材とは」をテーマに、木島洋嗣氏（ツリーアイランズシンガポール会社 代表・経営コンサルタント）を講師に迎え開催。講演では、「日本と世界・シンガポールの比較」、「調達・生産・物流・研究開発・人事などあらゆる統括拠点のグローバル化の現状」などの講演を伺いました。

■夏季集中講義

「海外での日本企業の戦略を学ぶ」をテーマに、8 月 11 日（木）から 9 月 15 日（木）の 4 回シリーズで開催しました。

第 1 回講義 8 月 11 日（木）
「なぜシンガポールに地域統括会社を設けるのか。人的資源管理の戦略とは」をテーマに、澤木聖子・本学教授から、シンガポールの国家政策と人的資源管理、日本企業の進出事例などを学びました。

第 2 回講義 8 月 25 日（木）
「日本企業はなぜ R&D 拠点を海外に立地するのか。」をテーマに、竹中厚雄・本学准教授から、海外進出の歴史や、日本企業と海外企業の海外 R&D の実例、グローバル・イノベーションなどを学びました。

第 3 回講義 9 月 12 日（月）
「シンガポールの戦略と経済政策、シンガポール進出日本企業の戦略とリスクマネジメント」をテーマに木島洋嗣氏と、「企業の海外戦略とリスクマネジメント」をテーマに、森本正信氏（元オムロンヘルスケアシンガポール会社社長）を講師に企業の視点からみた海外戦略について学びました。

第 4 回講義 9 月 15 日（木）
「グローバルに活躍するために求められるリーダーシップとは？」をテーマに、服部泰宏・本学准教授から、リーダーシップと持論の重要性や、リーダーとフォロワーの関係性、グローバル化とリーダーシップなどを学びました。

■シンガポールスタディツアー事前学習会

第1回事前学習会 10月6日(木)

第1回目として、宮西准教授から、シンガポールへの理解を深めるための参考文献の紹介と企業のホームページや有価証券報告書等を使った重要な財務数値、事業ポートフォリオなどの競合他社比較などの分析方法を学びました。

第2回学習会 10月18日(火)

第2回目では、現地企業訪問時のマナーや海外渡航時の諸注意のほか、服部准教授からツアー中に行う自己分析・他者分析について解説を受けました。

シンガポールスタディツアーは、多数の応募者から選抜された経済学部生30名と服部泰宏准教授、就業力育成支援室の柴田雅美特任准教授・高田友美特任准教授の合計33名が参加のもと、去る10月23日から30日の8日間で開催されました。

現地では、木島洋嗣氏のコーディネートにより、三菱電機アジア会社・シンガポール味の素社・三井化学アジアパシフィック・三井化学シンガポール R&D センター会社への訪問と各社のグローバルリーダーとの懇談、さらにシンガポールの国家戦略である政府系施設 (NeWater 水処理施設、OneNorth 地区、URA (都市再開発庁)、LTA (陸上交通庁)) を見学しました。

企業訪問では、三菱電機アジアの別府社長様から、「アジア新興国の重要性と戦略拠点の考え方、研究・開発におけるリスク管理や求められるグローバル人材の資質など」について、シンガポール味の素の瀬口様からは、「シンガポールの立地と産業特性を活かした世界調達戦略とアジア各国へのローカルマーケティングの重要性など」について、三井化学アジアパシフィックの武澤社長様・数野様からは、「アジアマーケティングの重要性と、それに伴うグローバル人材の確保の動き、優遇制度や知財保護の強さがカギとなるシンガポールへの投資など」を学び、活発な質疑応答で予定時間を超過する熱気あふれる場となりました。

今回の企業訪問でお世話になった皆様から、「事前学習もしっかりやってきており、こちらのお話を聞く姿勢、質問をしていく姿勢に熱意を感じた」と高い評価をいただきました。また、参加学生からは、「グローバル展開の最前線の体験を通じて、「グローバル人材として求められる資質やリーダーの理想像を得ることができた」、「夢に向かって進むことは、必ずしも一直線でもなく、あちこちと回り道をしていくことも大事だと感じた」という声や、「普段は交わりの少ない学生同士の交流ができ、帰国後の交流の幅が広がった」など多くの好評を得ました。

今回の取り組みは、講義による知識と実際の

現地スタディツアーでの体験を組み合わせることで深みと幅のある学びの機会になり、企業を舞台にしたグローバル人材育成プログラムとして実りの多いものになりました。

同行教員から一言。

服部泰宏准教授

グローバル経済における企業・国家戦略やリスク管理、マーケティングにリーダーシップ……。思えば、実に欲張りなテーマ設定でした。ツアー中は、企業・政府機関訪問から街角の露天商とのやり取りに至るまで、シンガポールという国にどっぷりとつかってもらいました。ツアー終了後、ある学生がこう言っていました。「アジアって、地理的にも情情的にも、思っていたよりも近いですね」。いろいろなテーマがあったけれど、このツアーを通じて私たちが学生にもっとも感じてほしかったのは、あるいはこうした距離感だったのかもしれない。シンガポールのビジネス街を颯爽と歩く彼(女)らの姿を目にする日は、そう遠くないと思います。

高田友美特任准教授

今回のツアーに同行して、普段の大学生活では体験できないだろうグループダイナミクスが生まれていることを感じました。厳しい選抜をクリアした意欲の高い学生たちが集まっていたこと、学年学科を超えて普段とは違う仲間たちと寝食を共にしたこと、そして現地の第一線で働いている企業人の皆さんが学生たちと率直に対話してくれたことなど、様々な要素が作用した結果だと思います。ぜひより多くの学生に、このように新しいグループに飛び込んで今まで見えなかった視点から自分の学び方・働き方を考える機会にチャレンジして欲しいと思います。

柴田雅美特任准教授

CM で登場するマリーナ・ベイ・サンズの展望台から「俺はこの街で仕事をする！」と宣言をした学生。現地のグローバルリーダーの姿に「将来に目指すカッコイイ男像」を重ねる学生。沸騰するシンガポールで30人の若者は30通りに弾けました。

今回のテーマ「グローバル人材の資質」とは。私はグローバルとしての特別な資質はなく、活躍の場がグローバルでもローカルでも、共に生活する人、働く人、商品やサービスを受ける人に対し自分は何ができるのか(他者貢献)を考え、夢に描き、実現していく資質が必要とされていると思いました。大切なのは、「人との関わり」。

若者の30通りの経験にも、多くの人との出会い、仲間の存在があったに違いない。今回得た“人との関わり”を、着実に次のステップへと活かして欲しいと思います。

今週の著書紹介

『労働再審③ 女性と労働』

編者：藤原千沙（岩手大学・准教授）・山田和代（滋賀大学・准教授）
 収録：大月書店、2011年、284頁 ISBN:978-4-272-30183-6



著者のつぶやき

本書は、「労働再審」という6巻シリーズ本のひとつです。このシリーズは、1990年以降の現代日本社会における「労働問題」を、男性、日本人、健常者、正規社員を前提にして把握するのではなく、従来の「労働問題」の範疇からは周辺の・逸脱的とされてきた領域あるいは排除されてきた労働に着目し、「能力」「移民」「周辺」「ケア・協働・アンペイドワーク」「生存権」など、多岐にわたる領域を再検討しています。

シリーズの第3巻である本書は「女性と労働」を取り上げ、現代日本の労働、生存、貧困をめぐる問題がいわゆる「女性労働問題」として捉えられてきた問題を出発点として生成しているとの認識に立つからです。

若手研究者たちと新聞記者、弁護士の計11名が精力的・挑戦的に執筆した各論説では、現在女性労働の過半数を占めた非正規雇用、なかでも高卒女性の行き詰まるキャリア形成、「女性活用」の功罪、女性労働にとっての専門職の位置、ケア労働の積極的評価の必要性、裁判闘争からみる「人間らしく働く社会」の追求を論じています。さらにこれまで労働研究では必ずしも十分に分析されてこなかった、消費される農村女性の労働実態、性産業へと流入する女性労働者の社会関係、そして労働組合と女性労働者の「貧困なる関係」の分析を網羅しています。

これらの論説が描き出すのは、日本の労働をめぐる社会構造を変革すること、私たちの生活圏を自律的に構築すること、そのためには「人々のつながりが不可欠である」というメッセージです。分断された女性たちの労働は多岐にわたり、差別／暴力／格差が広がる世界でどのように生き延びていくか、いまや男性も含めて私たちはもがき苦しんでいます。本書は、今日の「労働問題」を解決するためには、社会存続に必要な労働力再生産労働（家事・育児・介護などのアンペイドワーク）を必要不可欠な労働として認識し、そのために「必要な労働」とこれを行うために「必要な時間」を社会的に保障する制度構築が必要だと主張しています。これは労働時間の見直しやケア労働の再評価でもあり、さらには近代家族を前提にした雇用制度の再編にもつながるものです。

本書は、階層化され分断された女性と労働の世界を描きながらも、人々の「つながり」が力になることへの期待と、自己／他者の再生産の保障を通じた労働の場の変革を提起しています。自己の再生産が保障され、他者の再生産を補い合いながら、誰もが生きやすい社会を展望して、この本は編まれました。（山田和代）

教員紹介 「竹中厚雄」

経済学部企業経営学科准教授の竹中厚雄と申します。2002年に大学院を修了し、静岡県の公立大学に勤務の後、2008年4月に本学に着任いたしました。

さて、私の研究テーマですが、現在は日本の製造業の競争力について、特に研究開発の国際化と多角化をキーワードとして分析を進めております。ご存じのとおり、近年日本の製造業は国内の少子高齢化や経済の長期的な停滞などの様々な問題を受け、海外市場へと成長の場を求めています。一方で、新興国の目覚ましい発展とともに新たな企業がプレーヤーとしてグローバル競争へと参加するようになり、多くの日本企業がこれまでも増して厳しい競争にさらされるようになってきています。このような経営環境の変化を受けて、日本企業にはどのような成長の戦略が考えられるのか。この問題について、私は前述のキーワードを中心として現在研究を進めているところです。

研究開発の国際化と多角化は、ともに企業の国際成長の原動力となるものです。先進的な技術資源が世界中に分散する中、企業は本国の技術資源にのみ頼って研究開発をすすめては国際競争に勝ち抜くことができないため、海外でも研究開発活動を展開しています。また、例えばデジタル家電や自動車などに見られるように、競争力のある製品の開発に必要なとされる技術は近年ますます多様になっており、様々な技術領域の研究開発が企業に求められるようになってきています。そこで、これら二つのキーワードがどのような形で企業の国際競争力へと作用するのか、そのメカニズムについて定量的・定性的なデータの分析を行い、理論的枠組みを構築することが私の研究の中長期的な目標です。

気が付けば着任からもう（まだ？）4年目となりました。あらためて気を引き締めて、研究・教育に励んでいきたいと思っております。

たけなかあつお
企業経営学科准教授 竹中厚雄

リスク研究センター通信

アクティブ・ラーニング・ラボの紹介

アクティブ・ラーニング・ラボ（Active Learning Laboratory、通称：ALL（オール））は、「カフェ的学習空間」をコンセプトに2010年4月、校舎棟3階に新しい学習スペースとしてオープンしました。英語だけでなく様々な言語の語学教材（検定試験対策本から外国語に翻訳された日本の漫画まで）を数多く取り揃え、また、学生の海外旅行の写真が壁に貼られていたり、国際色豊かな空間となっておりますが、単なる語学学習ラボにとどまるのではなく、おしゃべり・飲食自由ということもあり、ゼミやサークルによるグループ学習や、学生主導のイベントなども活発に行なわれています。



利用者にとって使い勝手のよい学習空間にするよう、可能な限り学生からの要望を取り入れながらの運営を行なっているため、オープンしてまだ2年足らずにもかかわらず、当初から比べて、機器・教材もかなり充実してきており、今なお進化し続けています。今後は、近隣の大学・教育機関の学生との交流の場としても機能できるようになればと考えています。

いではけんいち
社会システム学科准教授 出原健一

「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

【サービスの提供】

1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

【サービスの変更・中止・登録削除】

1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

【個人情報等】

1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

【免責事項】

1. 配信メールが回線上的問題（メールの遅延、消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

【著作権】

1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変してblog等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

*尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。

(<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/3:12>)

*当リスクフラッシュをご覧頂いて、関心のある論文等ございましたら、下記事務局までメールでお問い合わせください。

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター

編集委員：ロバート・アスピノール、大村啓喬、金秉基、久保英也、
澤木聖子、得田雅章、弘中史子、宮西賢次

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局（Office Hours:月一金 10:00-17:00）
〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1 TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189

e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp

Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>